

【四】次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

なにもない海だ。

波もない。鳥もいない。月もない。

ただ、空いちめん、銀の粉になって、星が散るばかりだ。

海はくらく、つるりとしている。

雲も、ひとかけらもない。海のもここの戸棚（とだな）に洗（あら）いたてのシーツのように、たたんでしまつてあるのだろう。

どこまでもしずかな海だ。

海の底も、しずかだ。魚はねむっている。イカも、砂（すな）の毛布（もうふ）をかけて、ぐうぐうねむっている。コンブの林もしずかだ。ときどきゆれるのは、コンブの根もとで、魚がねがえりをうつからだ。海の底の砂粒（すなつぶ）は、ほんのすこしずつころがり、どこまでもどこまでも、しんとしている。

くらい夜の、なにもない海。

「ぽちゃん」

ちいさな音がした。

「ぽちゃん。ぽちゃん。」

またつづけてふたつ、音がした。

みると、ビロードのような海のうえに、ビロードのような、いるかが、ねころんでいる。

いるかが、ねむれなくて、夜の散歩をしているところだ。

さいしよの「ぽちゃん」は、いるかが、あおむけになったとき、しつぽで水をたたいた音。つぎの「ぽちゃん、ぽちゃん」は、ついでに、胸（むね）のひれで水をたたいた音だ。

お腹（なか）をうえにして首を持ちあげ、いるかは、ゆっくり背泳（せおよ）ぎをした。

「ああ。星がいっぱい。．．．．．なんてしずかなんだろう。さびしいくらいだ。」

いるかは、独（ひと）りごとをいった。
「さびしいくらいしずかだと、コドクがすきなぼくでも、だれかとお茶（ちや）を飲みたくなる」

ともだちは、おおぜいいるのだが、いるかは、自分のことを、コドクがすきな夕子だ、と思うのがすきだった。

「一、二、三、四、五．．．．．」

いるかは、星をかぞえながら、ゆるゆる泳いだ。

（工藤直子『ともだちは海のおい』より）

問一 ー線(ア)に「なにもない海だ。」とありますが、何が無い(いない)のですか。

問二 ー線(イ)に「海の底もしくだ。」とありますが、それはどうしてですか。

問三 ー線(ウ)の「ぼちゃん」は何の音ですか。

問四 ー線(エ)の「ばちゃん。ばちゃん。」は何の音ですか。

問五 ー線(オ)に「コドクがすきなぼくでも」とありますが、いるかはどうしてそう言ったのですか。 (「コドク」↓ひとりぼっち)

問六 この文を読んであなたの感じたことを、自由に書きなさい。